

2024年1月1日主イエス命名の日

旧約聖書 出エジプト記 34章 1-9節
使徒書 ローマの信徒への手紙 1章 1-7節
福音書 ルカによる福音書 2章 15-21節

東京聖三一教会の皆さま、新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく願いいたします。

昨日の説教では、一年の終わり大晦日ですが教会の暦では、新しい年が始まり約一か月が過ぎと述べていました。その教会歴で本日は、主イエス命名の日です。改めて、2024年の始まりの日に、イエス様のイエスという名前について学びましょう。

本日の福音書は、ルカ福音書あるイエス様の誕生の後の記述です。「八日がたって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。胎内に宿る前に天使から示された名である」（ルカ 2:21）とある通り、ユダヤ教の伝統に従い8日目にイエス様は、イエスと名付けられたのでした。

クリスマスの時にも学びましたが、ルカ福音書は、イエス・キリストの誕生の記事と、バプテスマのヨハネの誕生の記事とを対比させるような形で描いています。しかし、バプテスマのヨハネと比較して、イエス・キリストの誕生の仕方は不思議であったと記しているわけではありません。確かに、本日の福音書に「聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った」（ルカ 2:18）とありますが、不思議さがあるという意味では、両者とも同じです。大切なのは、主なる神様の約束は必ず実現するという主旨が背景にあることです。その約束の実現の喜びは、ザカリアとマリアの賛歌に見られます。約束の実現は、言い換えれば、主なる神様のみこころが先にあるということです。ただし、両者を対比させて描くことによって、そのみこころをもっとも明確に示すしるしが、救い主イエス・キリストの誕生の出来事である、そのようにルカ福音書は告げているのです。

最初に主なる神様のみこころがあり、そのしるしがイエス・キリストの誕生である、このような理解は、マルコ福音書にはなく、また同じく誕生を記したマタイ福音書とも異なり、むしろ、のちに書かれるヨハネ福音書が描くような、初めに神の言葉があるという観点に近いといえるかもしれません。天地創造の初めから主なる神様の意志からあり、歴史の出発点から主なる神様の意志が働いていると描かれているからです。

本日の福音書の物語で、イエス・キリストの誕生の最初の目撃者は、「天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、『さあ、ベツレヘムへ行って、主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか』と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝ている乳飲み子を探し当てた」（ルカ 2:15-16）とある通り、羊飼いたちでした。マタイ福音書では博士たちですが、ルカ福音書において、イエス様の誕生の後は、彼らが重要な役割を担います。彼らは、「今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」（ルカ 2:11）という、

天使たちのお告げに従って歩み、そして、「その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使から告げられたことを人々に知らせた」（ルカ 2：17）とあります。そして「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の告げたとおりだったので、神を崇め、賛美しながら帰って行った」（ルカ 2：20）のです。彼らが行ったこととは、人間の側に何かがあって起こったことではなく、最初から最後まで天使の告げたとおりであったことを確認したということでした。

バプテスマのヨハネとイエス・キリストの誕生には、その背景に最初に主なる神様のみこころがあると述べましたが、ことにイエス・キリストの誕生によって示されるみこころによって、人間は方向を与えられ、癒され、また生きる勇気を与えられるのです。クリスマスの時にわたしたちは毎年このことを確認しているとも言えます。そして、それが大きな喜びであり、また励ましである理由は、聖書日課の少し前の箇所ですが、羊飼たちへの告知のちに起きた天上の賛美に示されています。「すると、突然、天の大軍が現れ、この天使と共に神を賛美して言った。『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』」（ルカ 2：13-14）とありますが、これは人間の意図を超えた主なる神様の救いの計画が実現したことを、地上ではない天の軍勢が賛美している姿です。天上に属するものたちが、地上に属するものがたちに全く依存することなく、賛美しているのです。賛美はそもそも天地万物が主なる神様に対して行なうべきことですが、ここでの賛美はまったく天上の神中心の出来事です。それでは、地上には何もないのかという、地上における、救いの出来事の基礎、出発点としてのしるしイエス・キリストの誕生をどう受け入れるかが求められるのです。

イエス・キリストは、永遠の救いの認識根拠であり、永遠の救いの実在根拠です。そこに主なる神様のみこころが示され、そのみこころは一言でいえば愛です。その愛を一言で示す名前が、「イエス」という名前にほかなりません。「イエス」という名前は、わたしたち人間を真の目標へと導きます。それは永遠の生命です。しかし、多くの人はこの目標を途中であきらめるか、そもそも必要としないのです。そしてそれゆえに、地上においてできるだけ自分の欲望の充実を求めて争い合うのでしょうか。

主なる神様は、イエス・キリストという救いの根拠によって、それを受け入れた人をそのまま受入れてくださいます。人間ができることは、まずそのことへ感謝を捧げることです。教会は、その感謝を示す集まりであるとも言えます。クリスマスが教会に限らず多くの人に多くの場所で受け入れられ、祝われるのは、その背景に何となく、自分たちを受け入れてくださる主なる神様の愛を感じているからかもしれません。今年一年、どのような年になるかわかりませんが、主なる神様への感謝を忘れた地上において、悲しい出来事が数多くおこるかもしれません。しかし、主なる神様は、その悲しみを超える救いへの根拠をイエスという名前を通して与えてくださっていることを、共に確認したいと思います。そして、2024年も主なる神様に感謝をささげ続けたいと思います。